

櫻井 匡 著

大東亞回教發展史

三省堂刊

櫻井 匡 著

大東亞回教發達史

東京
大阪
三省堂刊

(出版會承認)
(イ11063號)

昭和十八年六月十月初版印刷
昭和十八年六月二十日初版發行

(三〇〇〇部)

大東亞回教發展史

定價二圓
特別行平稅三錢
實價二圓三錢
相當富三錢

著者

サクラ
櫻井イ
マサシ
匡

發行所

東京市神田區神保町一ノ一
株式會社 三省堂
代表者 龜井豊治

印刷者

大阪市浪速區稻荷町二ノ九三五
株式會社 井村印刷所
代表者 井村雅有
會員番號西大一一九二

發行所

東京市神田區神保町一ノ一
株式會社 三省堂
振替東京三一五五五
株式會社 三省堂大阪支店
大阪市西區阿波座下通二ノ六
會員番號一一一五〇一

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

回教發展史

序

回教はアジアの宗教である。アジアに起り、アジアに榮えてゐる宗教である。しかも今や大東亞新秩序の建設にあたつて、吾人の關心を惹く一大問題となつてゐる。

わたくしは回教が如何に發展して來たか、その發展のあとをたどつて見た。完全なる回教史ではない。それにしても何程にても回教に關する知識を求める方々に對し、手引ともなり得れば幸である。

昭和十八年二月十一日

櫻井匡識

目次

第一篇

第一章 大東亞と回教

一回教の地位

二 民族的自覺と運動

第二章 マホメット

一 人間としての半生

二 預言者としての半生

(一) 天啓を受く

(二) 活動

(三) 反對と迫害

(四) メツカを逃れメヂナに赴く

(五) メヂナの晩年

目次

第三章	回教勢力の興隆	四三
一	正統カリーフ時代	四三
二	王朝時代	七六
(一)	オメヤド王朝	七六
(二)	アッバス王朝	七九
(三)	後オメヤド王朝	八三
第四章	教理と行事	八三
一	信	八三
二	勤行	九二
第五章	宗派と生活	一〇一
一	宗派	一〇一
二	生活	一一四
第二篇	大東亞に於ける回教の發展	一元
第一章	支那の回教	一元

目 次

一 支那への傳播	一
二 支那に於ける發達	一七
三 支那回教徒	一四
第二章 滿洲國の回教	一三
第三章 印度の回教	一六
一 回教とヒンヅー教	一六
二 回教の傳來	一七
三 回教 王國	一八
四 現在の回教	一七
第四章 東印度の回教	一五
一 概 説	一五
二 回教の傳來	一六
三 回教の傳播とその影響	一三
第五章 比律賓諸島の回教	一四

目 次

一回 教民族	二五
二 傳 來	二四七
三 回教徒モロ族	二五三
四 モロ族の反抗	二五七
第六章 マライ半島の回教	二六一
第七章 我が國と回教	二六六

第一篇

第一章 大東亞と回教

一回教の地位

回教は佛教、基督教と相並んで世界三大宗教の一と算へられてゐる。しかも大東亞に於けるその勢力は佛教と共に極めて大なるものがある。兩宗教ともアジアに主勢力を有し、ヨーロッパその他に於ける勢力は甚だ振はない。共にアジアの宗教である。

三大宗教共にアジアに發生したものであるが獨り基督教のみは西に向つて發展し、現在は全く歐米諸國の宗教となつてゐる。佛教、回教のみがアジアに發生し、アジアに行はれてゐる。此の點兩教相似てゐるのであるが、併しその他の點に於ては全く相反するものがある。一方は無神教的であり、他は有神教である。尤も佛教にも有神教的と見られるものもあるが、むしろ汎神教的である。回教に於ては有神教にして、而かも一神教である。ア

ラーの一神の存在を認めてこれに絶対歸依をなすの宗教である。凡そ宗教には多神教と一神教及び汎神教とがある。多神教に於ては多くの神々の存在を認めてそれに歸依する。またその中にも多神の存在を認めながらその中の一神を選んでこれを崇拜する如き一神教もある。これは前述の唯一神を信仰するものとは異なる。それから多神教の中でも交替神教など云はれるものがある。多神の存在を認めるが、或る時にはその中の一神を尊崇し、他の場合にはまた他の一神を尊崇する如く時々によつて異なる一神を尊崇するものである。それらは唯一神のみの存在を認めてこれに歸依する一神教とは異なる。

汎神教はまた萬有宗教とも呼ばれるが、一神と云ふてもその一神は宇宙萬有に遍在してゐるものである。一にして凡てであり、凡てが一に合する神を尊崇する宗教である。梵は一切にして一切は梵であるとなすウパニシャッドの宗教は正にそれである。

かく見て回教は唯一神のみを尊崇する宗教であつて唯一神教であるが、佛教は無神論的立場にはあるが、汎神論的である。佛教もそのもとは偶像的のものを排したが現在に於ては汎神論的立場から諸種のものをも尊崇する。然るに回教は唯一神以外の一切を排する。マホメットは偶像崇拜打破を叫んで回教を起し偶像打破によつて回教を擴めたのである。

一 回教の地位

さて回教の分布を見ると前述の様にアジアを主として擴まつてゐる。アラビアは回教發祥の土地であるが現在に於ても尙ほアラビア全土に行はれてゐる。マホメットの生れた土地メッカ及びマホメットが終焉の地であるメジナの聖地には全世界から巡禮する信徒が引きも切らぬ状態である。

トルコは回教國として知られてゐる。シリア、イラク、イラン、アフガニスタン、トルキスタン、インド、支那、滿洲更に南方に行つてマライ半島、東印度諸島さては比律賓群島等には回教が行はれてゐる。その他ヨーロッパ、アフリカ或はオーストラリア大陸等にも行はれてゐる。ただ併しそれらの地方にはそれほど勢力なく、アジアに於て最大の勢力を有つてゐるのである。

世界の全回教徒は約三億萬と云はれてゐる。尤も先年我が國を訪ねたイエーメンの宗教大臣、ギプシーを中心に讀賣新聞社が座談會を開いた時在留シリア人のタフィックは四億五千萬と云はれたが、それは少々過大に過ぎるのではないかと思ふ。何れにしてもアジアに於ける回教徒數はその三分の二位に及んでゐるのである。數で云へば二億萬以上がアジアに於ける回教徒なのである。その中で最も多い所は七千萬の回教徒を有する印度であ

る。これに次いでは東印度諸島の六千萬、支那に於ける五千萬である。トルコは回教國として存在したが前大戰後回教々首も廢され著しき打撃を受けてはゐるが一千萬以上のトルコ人は殆ど凡て回教と見る事が出来る。首府コンスタンチノープルには八百餘の回教寺院があつて依然回教勢力の中心たりし跡を残してゐる。事實回教はその國民宗教として行はれてゐるのである。

回教は如何にしてかかる大勢力を得たであらうか。如何にしてかく傳播したのであらうか。回教には宣教師もなく、傳道者もない。しかも何時とはなしに擴まるのである。回教の傳播は一面から見れば民族移動の結果に外ならないのである。回教徒はアラビアの不毛の地から肥沃の地を求めて移住した。また商人として各地に往來した。そして或者は世界の各地に渡つてそこに定住した。定住すれば、其の地に於て雜婚が行はれる。土地の婦人を娶つて妻とする。妻とすれば同時に之を回教に改宗せしめるのである。そしてその間に出来る小供は勿論回教徒として育てられる。更にまた結婚した妻の家族で改宗するものも出来る様になつて回教は宣教師の働きによらず、また傳道者の活動によらずして擴まつたのである。回教徒は異宗教の婦人と結婚する事が出来ない規定であるが、その婦人が改宗

する事となれば認められるのである。それ故結婚によつて多くの回教徒が出來た。

また支那などに於てしばしば行はれたことは小兒を買ひ取る事であつた。惡疫が流行したり、或は饑饉などで住民が苦しんでゐる時、小兒を買ひ取つたのである。一面に於ては住民の困苦を救ふこととなり、また他面に於てはそれらの災害のため死去した回教徒の補充ともなしたのである。

しかも回教の傳播には多く武力が伴つてゐる。マホメットがメヂナに本據を据えてからの發展は全く侵略に外ならない。所謂聖戰によつて改宗奉教を迫つた。若し奉教せざれば朝貢せしめてこれを許すといふ有様であつた。これは大いに經濟問題と關係のあることで回教徒の移住といふ事が考へられる。生活の苦しい地方から安易に生活の出來る豐沃の地へと移動したのである。従つてそこには宗教的宣傳といふ如きことは考へられない。ただ移住の後同一宗教を奉ずる彼等はやがて相集まつて禮拜を行ひ、集會をなし共に禮拜寺院を建設して落付くこととなつたのである。従つてまたそれらの移住者の團結は自然強固になり、今日に於ても回教民族の團結力が強いといふ様なことが言はれてゐるのである。

併し何時も必ず武力のみによつて傳播したのではない。極めて平和裡に傳播した地方も

ある。支那の如き、南方東印度諸島の如き地方は殆ど聖戦といふ如き事なく平和裡に回教が傳播してゐる。反對に印度の如きは數次の戰鬪によつて侵略された地である。尤も支那に於ても或る時は回教軍が侵入したこともあつたにはあるが、それはホンの僅かであつて忽ちにして終り、またそれによつて回教徒の移住ともならず、回教が移植されるまでには達しなかつた。

回教は數個の宗派に分れてゐる。大體二つに分けられる。一は正統派とされてゐるスンナ派であり他はシーア派である。シーア派は第四代カリーフとなつたアリーの系統から出たもので、アリーの系統を正統カリーフと認めそれ以前並に以後のカリーフを認めない一派である。従つてこの派に於てはカリーフなる語を使用せず、イマム（指導者）なる語を使用する。またコーランと相並んでその補助をなすスナンを認めないのである。

これに對しスンナ派はスナンを認め、アブ、ベクル以下のカリーフを正統となすものである。併しスンナの解釋に關して四學派が分れ、それが同時に宗派となつて四つの分派が出来た。即ちアブ、ハニファの創説にかかるハニファア派、マリクを祖とするマリク派、及びアル、シャフィーを祖とするシャフィー派更にイブン、ハンバルを祖とするハンバル

一 回教の地位

派である。この中ハニファ一派は四分派中最大の宗派である。またスンナ派は現在世界中回教の行はれてゐる各地に廣く行はれ回教徒の大部分がこの派に屬してゐる。然るにシーア派は主としてイランに行はれてゐるだけで、その他地方には殆ど問題にならない程の數である。回教徒全體の約一割程度がシーア派に屬する有様で甚だ振はない。

かく觀て回教はアジアの宗教であり、大東亞に偉大なる勢力を有する宗教であることを知るのである。しかも現在我が國としては新らしく回教問題に就いて考へねばならなくなつた。從來諸外國に於ては回教問題が可成り重大なものとなつてゐたのであつて我が國はむしろ非常に遅れてゐるのである。これも從來我が國と回教との關係が餘りなかつたからである。併し最近に至つては蒙疆地方に於ても相當問題となり、更に大東亞戰爭に於て舊蘭印諸島の如き回教國の統治に當るに及んで一層回教が問題となつたのである。試みに獨伊などを見ても回教對策は重大視されてゐる。獨逸の回教對策、イタリーのその如き何れも早くから考慮されてゐる。獨り樞軸國のみでなく、聯合國側に於て重大問題となつてゐるのである。今大東亞の盟主として立つ我が國にとつて回教問題は決して等閑に附し得ない事となつた。

併し遺憾ながら回教は我が國に於て充分理解されてゐない。尙ほ遅くはないのである。

否充分理解せずしては大東亞の建設を圓滑に運ぶことは出来ない。かつてイタリアのムツソリーニが、回教徒の保護者なりと言明して、エチオピア攻略にどれほど回教徒の助けを得たかを思へば回教問題の如何に重大なるかがうかがはれる。

回教徒はマライ人を始めアジア人である。有色人種である。有色人種であり、アジア人である日本が日露戦争に於て白色人種を敗つた時回教徒は狂氣せんばかり喜んだ。彼の舊蘭印地方の回教徒の喜び方は一通りではなかつた。アジア人であり、有色人種である回教徒は白色人種を好まないものである。白色人種の宗教は基督教であり、基督教と回教とは大いに相通するものがあり、基督教の影響も及んでゐるのであるが、兩者の間には氷炭相容れぬものがある。今次大東亞戦争の結果舊蘭印は我が領有となり、その回教徒は我が統治下に在ることとなつた。一度は白人の手先きとなつて我國に對抗しては居るが、元來がアジア人であり、有色人種である。日本の強さを知り、日本の實力を知つた彼等は喜んで我が統治下に在るのである。大東亞建設の柱石たる我國は速やかに回教民族を理解し、回教徒との親善をはかるべきである。

二、民族的自覺と運動

二 民族的自覺と運動

今日東印度諸島住民の文化は決して進んだものと云ふ事は出来ないが、しかし非常に自覺し發展へと進んでゐるのである。從來オランダの統治下にあつて、所謂『腹を充たして頭を空にする』政策により治められて來てゐた。民族的自覺に進まない様に、獨立的考へなど起さない様にと細心の注意によつて治められて來たのである。

併し目醒むるものに眠りを促すことは容易に出來得ない。東印度諸島民族も次第に自覺に向つたのである。自覺したこれら民族の間には次ぎ／＼に幾多の民族運動が起つた。しかもそれが凡て回教徒と深い關係にあるのである。

先づ第一に一つの政治的團體として現はれたものはブデイ、ウトモ(Boudi Outomo)である。主として一般土民の智的向上をはかる目的を以て起されたのであつたが、次第に政治的に進み全くの政治的團體となつた。併し時期尙早のため餘り發展もせず、活動もなくじて終つた。第一回の會合は西曆一九〇八年に開かれた。

次いで西曆一九一〇年にはサリカト、イスラム(Sarikat Islam)なるものが現はれた。